

思い出の工学部 14 号館 —北京大学、張天新先生からのエッセイ— Memories of BLDG.14 of Eng —An Essay from prof. ZHANG Tianxin—

1998 年から 4 年間博士課程の学生として都市デザイン研究室に在籍され、現在は北京大学の副教授でおられる張天新先生が 14 号館の思い出を綴った、心温まるエッセイです。



▲張天新先生近影

現在は北京の隠れ家にいる私は、1998 年から 2002 年までの 4 年間、東京の隠れ家にいました。それは、私が当時所属していた西村・北沢研究室の所在する、東京大学工学部の 14 号館です。この 11 階建ての建築物は、当時主に 4、5 階建ての本郷キャンパスにおいて、目立っ

て高層でした。現代主義の箱のようなデザインも、ほぼ欧州古典主義の建物に構成されたキャンパスとは全く別物で、伝統を超えた先端性を表現しようとしているように思えました。玄関を通り、エレベーターに乗って 9 階に上がると、その左側にある廊下は研究室の部屋に至ります。研究室は都市デザイン研究室と呼ばれ、廊下を挟んで西村教授と北沢教授のオフィスの向かい側は、学生と助手が使う研究室です。部屋には、一つ大きなテーブルが設置されていて、研究室会議やプロジェクトをめぐる議論する姿は日常風景でした。

10 階には、もう一間の院生用の部屋がありまして、9 階より若干心地いい感じがします。一つ丹下時代から残されたソファが長いこと、徹夜する学生の支えとしてあります。また、廊下の向かい側には、100 平米くらいのテラスがあり、欄干の上に登ると、1メートル幅の座れる場所があります。

私は 1998 から 2002 年の間に、この 10 階の部屋にいて、時に休みの日も頑張り、指導教師も有望と思わない研究をし続けていました。特に卒業した 2002 年 3 月前の半年間、向かい側のテラスと欄干の上が一番好きなどところとなりました。疲れたときに、そこでボーっとしたり、スポーツをしたり、知り合いとチャットしました。今考えてみたら、14 号館のテラスや壁などが対話できるような友達みたいに、ずっとそばにいてくれて、国外に置いて避けては通れない孤独感に苦しんでいた私を救ってくれました。

テラスから遠くへ眺望すると、東京は眠っている巨大な生物のように、14 号館の足元に横たわっていて、視線が地平線へ渡ります。もちろん、私にとって大事な場所は他にいくつありまして、本郷のキャンパスに溢れる緑もそのひとつです。例えば、三四郎池は北京大学の未名湖に対する私の思い出を呼びおこし、静かな湖面が生まれたばかりの赤ちゃんの

ように、周囲の林に囲まれ、眠っています。また、ほぼ毎日通った中央食堂には、大好きな焼きサバがあり、今でもよくその口にとろける食感を思い出します。そして、御殿下のプールや、心地いいソファがある中央図書館、週一回バイトで通っていた会社、自転車で調査していた東京の水辺、夜の眠り場としての暖かい部屋…テラスから眺めると、東京生活の喜びや辛さが全部心に湧き上がってきますが、目の前にあるこの雄大な都市風景を眺めていると、すべて重要ではないかのような気になります。

こうして、私が東大の 14 号館を中心に、青年時代の最後の数年間を過ごしていました。数えたら、その頃からはもう 10 年も経って、当時若かった指導教官の西村教授が還暦を迎え、北沢先生が他界され、私も白髪の歳になりました。戻ってこない青春は、14 号館壁に落ちた雨跡やテラスに聞こえる風声のように、気付かなかったうちに遠くに離れてしまいました。よかったのは、その頃の記憶を保ってくれた 14 号館がまだいつもの場所にあり、きっとまた私の心声を聞いてくれるでしょう。

(2012 年は私が東京大学から卒業した 10 周年でもあり、指導教官の西村幸夫教授の還暦でもあり、記念のために、この文を書きました。懐かしい東京生活への憧憬も含め、心より当時一緒に生活していたデザイン研の皆様に感謝の気持ちを申し上げます。)

注：この文は 2012 年第四期の『北京計画建設(北京规划建设)』に発表された「東大 14 号館」より抜粋し、傅舒蘭研究員により翻訳されたものです。中国語の原文は研究室ホームページ内 (bitly.com/VLqTaw) でご覧になれます。



▲ 14 号館から望む景色



▲張先生お気に入りの 10 階テラス

好評連載

"まち大コーナー 第3弾！"

A Message from MPS student vol.3!

【都市空間を美しく、楽しく創る】

まちづくり大学院 4期 江島 知義



▲新潟市の第四銀行住吉町支店の復元



▲ストラスブールのクリスマス

この10月から博士課程に進学された江島さん。設計事務所での実務と、大学院での研究の両面から都市に携わっていらっしゃいます。

私は昭和43年生まれの東京下町育ちです。小さい頃からの宇宙好きが、なぜか建築設計事務所に就職し歴史的建造物の保存活用(写真1)を中心に設計業務を行っています。写真2は、まち大で紹介されたストラスブールです。車の排除が街路空間にどのくらい影響を与えているのか、実際に見に行った時のワンショットです。クリスマスではあったものの街路に人が溢れ、車から開放された街路がこんなにも快適なのかを感じました。

都市空間を美しく、楽しく創ることが経済も発展し社会全体の幸せに繋がるのではないかと修士研究で考えてきました。博士課程では更に突っ込んで考えて行きたいと思います。

プロジェクト報告

山場を迎える、充実の秋！

11月のイベントに向けて準備に大忙しの清水PJと、調査の集大成となる冊子の完成を迎えた鞆PJからの報告です。

清水 Shimizu-project プロジェクト

空間計画研究室 遠藤 友里恵

清水プロジェクトでは、11月25日静岡県清水区日の出町にて「ミナトブンカサイ」を開催します。静岡市様、(公財)静岡市まちづくり公社様の尽力のお陰で当日の出演者・出店者がほぼ出揃ってきました。4日(日)は出演者・出店者の方々と当日必要な機材や現在の進捗状況などを相談し、打ち合わせの空き時間には、静岡市の中心部にある空き地を暫定利用している「アトサキセブン」に立ち寄りしました。夏に訪問した際にはなかった子ども向けのお手製アスレチックが出来上がっており、更なる賑わいが生まれています。最後には今回の企画で大々的にアート企画を実施して下さる常葉学園大学の土屋先生、学生と当日までの流れを確認しました。残り3週間、多くの方に来て頂けるようしっかりと準備を進めていく予定です。



▲出店者に趣意説明をする大森・萩原



▲竹製ジャングルジムに登る大森

鞆 Tomo-project プロジェクト

環境デザイン研究室 馬場弘樹

鞆プロジェクトではこれまでに鞆の空地に関して、悉皆調査に始まり、ヒアリング調査、歴史地図調査を行なってきました。そしてその結果として、鞆を代表とする歴史的な市街地における空地の共同利用、多様な主体の管理等が明らかになってきました。これまでの成果を特に住民の方々に還元したいという思いから、冊子作りは始まりました。

この冊子では、今年度に行った空地調査を始め、過年度に行われた祭事・生業調査の内容も含め、さらに学生による空地活用提案まで行われています。10月下旬には、実際に空地のヒアリング調査にご協力頂いた方々に冊子を配布に行き、配布した住民の方から餠頭を頂く等、多くのご厚意を頂きました。この場をお借りして、鞆の空地冊子にご協力頂きました方々に、厚く御礼申し上げます。



▲鞆空地冊子表紙



▲祭りの時にも活用される空地

11月の予定

- 11月13日 清水現地訪問
- 11月16日 卒論会議
- 11月25日 清水ミナトブンカサイ
- 11月25日 大槌現地訪問(赤浜ヒアリング調査)
- 11月27日 研究室会議

Information

★ 編集後記

福士 薫

先日、ご当地グルメの祭典B-1グランプリが北九州市で行われ、私の故郷青森県八戸市の郷土料理「八戸せんべい汁研究所」が悲願のゴールドグランプリを受賞しました。実は八戸はB-1グランプリ発祥の地なのですが、これまで2位、3位が続き惜しくも1位を逃してきました。「せんべいを煮込むなんて！」とよく言われますが、これからの寒い季節にぴったりの料理です。東京でも食べられるお店があるそうなので、ぜひお試しあれ。